

久田 恵

おかえりなさい、 おかあさん

ワーキングマザーと
子どもたちの
30のお話

久田 恵

PHP

〈著者略歴〉

久田 恵 (ひさだ めぐみ)

1947年北海道生まれ。上智大学文学部中退。現在、ノンフィクション作家として活躍中。『フィリッピナを愛した男たち』で第21回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。その他の著作に『母親が仕事をもつとき』『サーカス村裏通り』などがある。

おかえりなさい、おかあさん

ワーキングマザーと子どもたちの30のお話

1992年1月24日 第1版第1刷発行

著 者	久 田 恵
発 行 者	江 口 克 彦
発 行 所	P H P 研 究 所
東京本部	〒102 千代田区三番町3番地10 第一出版部 ☎03-3239-6221 普及一部 ☎03-3239-6233
京都本部	〒601 京都市南区西九条北ノ内町11 ☎075-681-4431
印刷所	図書印刷株式会社
製本所	

© Megumi Hisada 1992 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-53522-4

日本音楽著作権協会(出)許諾第 9165084-101 号

はじめに

——働く母親とその子どもたちがどこかで味わった思いを伝えたい

夕方の六時頃だったろうか。

事務所に残って一人仕事をしていると、電話が鳴り、受話器を取ると小さな女の子のなんともはかなげな声が聞こえて来た。

「あのう、おかあさん、いますか？」

女の子は、八歳になる友人の娘で、彼女の母親が時折、私の事務所に立ち寄ることを知っていて電話をして来たらしい。

「ああら、アーちゃん、おかあさん今日は来てないわよ」

なに気なくそう言うのと、とたんに電話がぶつりと切れた。

なにかあったのだろうか。急に気になって手帳を繰り、番号を捜して電話をし直した。

「はい、——です」

今度は妙にしつかりした声で返事が返って来た。

「アーちゃん、さつきおかあさんに何か用があったの？」

「ううん、別に……」

とりとめないことを少し話した後、たぶん、もうじきおかあさんは帰ってくるからね、待っててね、と言ってそつと受話器を置いた。

受話器を置いて窓の外を見ると、すっかり日が暮れていて、その暗い窓にぼつねんと一人アパートの部屋に座っている小さな女の子の姿が浮かんた。ふと、どのくらいの子どもたちが、母親が仕事から帰って来るまでのこの時間を、今、一人で過ごしているのだろうかと思った。

その後、何度か事務所の留守番電話に「おかあさん、いますか」とだけ言つては、ぶつん、と切れるアーちゃんの声が録音されていることがあった。

そんな時、「ねえ、昨日、アーちゃんの声が留守番電話に入っていたよ」と彼女の母親に言うのだが、「あらあ、なんだろう、あの子なんにも言つてなかったけど」と彼女は首をかしげるのだった。

その度に「もっと、早く帰ってあげたら」と、言いかけた言葉を私は飲み込んだ。なにしろ、私もまたアーちゃんと同じ年頃の息子の母親で、その頃はとりわけ忙しく

早く帰りたくとも帰れない日々を繰り返していたのである。

そんな私の許に女性誌からエッセイの連載をさせてくれるという話がきた。迷わず、私の息子やアーちゃんや、それからいろんな働く母親の子どもたちのことを書きたい、書かせてほしいと思った。

子どもたちの許へエピソードをもらいに取材に出かけたり、友人に子どもをめぐる話を聞かせてもらったりするようになったのは、それ以来である。

働く母親とその子どもたちなら、きつとどこかで同じような思いを味わったにちがいない、ささやかだけれど、心に残っているあの日のあの時のこと。いずれも、私たちにちよつと切なかつたり、苦い味がしたりするけれど、働く母親を支えているのは、この子どもたちだということをやっぱり忘れてはならない、そんな気がするのである。

目次

はじめに

——働く母親とその子どもたちがどこかで味わった思いを伝えたい

I 自分が子どもだったことを覚えていますか？

1 天井 10

2 鍵 15

3 百円玉 20

4 灯 25

5 少年野球 30

6 夏休み 37

一人になる時間

——子どもにだって一人になりたいときがある

II 母親にも泣きたい朝がある

7 金曜熱 48

8 指しやぶり 53

9 おねしょ 58

10 風疹 63

一人になる時間

——形にならない愛情をどう伝えたいの？

68

III 明日は元気になる方法

11 クラリネット 74

12 モーニングコーヒー 79

13 ブランコ 84

14 初めての保育園 89

一人になる時間

—— 赤ん坊を抱いて出掛けた初めての日のこと 94

IV 母親が会社の顔になるとき

15 係長 98

16 子連れ出勤 104

17 ストライキ 109

18 階段の下で 115

一人になる時間

—— 働く母親の強さは優しさの中にある

—— 口に出せない妻の役割の重みって？

123 120

V 子どもと共に生きるということ

19 チョコレートパフェ 128

20 ペガサス 133

21 白い服 138

22 弟 143

一人になる時間

——「子どもがカワイソウ」と言わないで 148

——いろいろな家族があってもいい 152

VI 子育てとは祈りのようなもの

23 雨 156

24 オレンジ色の帽子 161

25 目玉焼き 166

26 だあれもない 171

一人になる時間

——自ら生まれてくるものについて
176

VII みんなで囲むシチューは温かい

27 おとうさん
180

28 心配
185

29 お兄ちゃん
190

30 料理当番
195

おわり

——いつもけなげだった彼と彼女たちへ

装幀・本文イラスト／太田拓美

I

自分が子どもだったことを覚えていますか？



1.

天井

天勝の「天井」はやっぱり「ウマイ！」と裕くんは思う。

尻尾の先までカリカリしている大きなエビ天が二本ものついで、タレのしみたご飯がほっこりとあったかい。それで香の物とインスタントみそ汁の袋がついていて、一人前一〇〇〇円。おかあさんは、「子どもには味も値段もゼイタクなんだゾ」と威張って言うけど、そんなに高くないじゃないか、と思う。

小学校三年生の裕くんは、月に平均三回はこの天勝の天井を食べる。

というのも、学童保育館から帰って来て、ぼけっとテレビを見ている六時過ぎ、時々、「ただいま」と帰って来るはずのおかあさん

1 自分が子どもだったことを覚えていますか？

の代わりに電話が鳴るからだ。

電話口のおかあさんはいつもヒソヒソ声だ。仕事中の会社の人にあんまり聞かれたくないからだと言う。

「裕、ごめん。今日、遅くなる。出前を取るけど何がいい？」

親子丼にしようか、カツ丼にしようか、と一瞬迷うけれど、最後は思いつきりの大声で「天勝の天丼！」と裕くんは言ってしまう。

「やっぱり天丼か、あんたも好きねえ」

と、おかあさんは笑う。それからきまつて、おかあさんのヒソヒソ声が急に大きくなる。

「ぼけっとテレビ見てないで宿題すんのよ、宿題。おかあさんは九時頃帰るからね」

ガチャンと電話が切れると、テレビの音だけがやけに大きく響いて、ちよつとだけひとりぼっちの気持ちができる。

おかあさんが九時と言った時は十時になる。おとうさんは、もっと遅い……。

でも、なぜかひとりの時の方がきちんと宿題をする気分になる。宿題が済んだら、鉛筆も削って翌日の教科書も揃えてしまう。

「親がいないと、緊張するのよ」

と、おかあさんは言うけれど、電話で言われたことって、ちゃんとやらなければいけないような気がしてしまうのだ。

おかあさんの電話から三十分位すると、マンションのチャイムが鳴って「チワー、天勝でーす」と、天井が届く。

最初の頃は、張り切ってお湯を沸かしてインスタントみそ汁を作ったりしたけれど、この頃はめんどくさくなって、井をそのままテレビの前に持っていく。時々、マンガを読みながら寝転がって食べる。思いつき行儀悪くしてしまう。

食べる順序は好物のエビ天が先。おかあさんがカルシウムがあるっていつも言ってるから尻尾まで食べちゃう。それからタレのしみたご飯をゆっくり食べる。それが、裕くんの流儀だ。

「ひとりで、淋しくない？」

と、おかあさんは年中聞くけど、

「天勝の天井が食べられるから平気」

I 自分が子どもだったことを覚えていますか？

と、答えることにしている。

本当は、みんなで天井を食べるのが、いちばんいいと思うし、好きにできるからひとりがやっぱりいいと思うし……。

とにかく、そういうこと聞かれるのって、子どもはあまり好きじゃない。

ある時のこと。

おかあさんの「今日遅くなる」の電話の後、一時間たっても、二時間たっても、天井が届かなかった。

あんまりお腹が空いたので、冷蔵庫から食パンを出してジャムをつけて食べた。牛乳も飲んだ。これだけじゃ栄養が足りないんじゃないかと思って、生卵も一個飲んだ。

それでも、天勝の天井は来ない。今日は天井だぞ、と思ってしまったせいかな、他の何を食べてもお腹がいっぱいにならない気がした。

台所のテーブルの前に座ってじっとしていたら、冷蔵庫が時々、ブーンと鳴った。流しはきれいに片付いていて、食べものの臭いは何もしない。

だんだんおかあさんに腹が立ってきた。出前を頼むのを忘れちゃったんだなと思っ

た。帰って来たら、すっごく怒ってやる。

夜の九時過ぎ、おかあさんが帰って来た。

「天井、来ないよ、僕、頭のでっぺんまで怒ってる！」

と、言うとおかあさんは、玄関口に突っ立ったまま「ウソツ」と、叫んだ。

「ちゃあんと、頼んだんだからあ」

それからちいさい声で「ごめん」と言ったので、大急ぎでパンと牛乳と生卵をちゃんと食べたって言ったら、おかあさんが、急に泣き出した。

びっくりした。びっくりして、僕まで泣きそうになった。だっておかあさんは強いから泣いたりすることないって思ってたから。

その夜、裕くんが「もう何もいらない」と言うのに、おかあさんは着替えもしないで鍋にお湯を沸かしてスパゲティをゆでて、スパゲティナポリタンを作った。ナポリタンはおかあさんと一緒に食べた……。

以来、裕くんは、なにかにつけて「おかあさん、あの時泣いたんだよね」と言う。おかあさんは、いつも、ふふっ……と笑う。